

科学か，民衆の想像力か
ピクウィック氏のフォークロア
Science, or Popular Imagination: Mr. Pickwick's Folklore

光沢 隆
Takashi KOZAWA

『ピクウィック・ペーパーズ』(1837; 以下『ピクウィック』)は、「ピクウィック・クラブ」の会長であるピクウィック氏と彼の友人たちが、そのピクウィック・クラブの活動として、さまざまな地域を訪れ、伝説、遺跡、地理的特徴などの情報を収集する過程で体験する出来事の世界である。そして、そのようにしてピクウィック氏が収集したもののなかで、この小説にとって重要な意味を持っているのが、本筋であるピクウィック氏の物語から独立して挿入されている物語である。それらの物語は、ピクウィック氏たちが収集した、さまざまな地域の、さまざまな人々の物語であり、ピクウィック氏自身の物語と直接関係をもっているわけではない。しかし、パタン (Robert L. Patten) やハーバート (Christopher Herbert) は、そのような物語がピクウィック氏の物語と密接な関係をもっていると指摘する (Patten 356-66; Herbert 8-20)。例えば、妻と息子の死に責任があるとして、義理の父親を執拗に追跡し、復讐するヘイリングの物語 (284-96; ch. 21) は、パーデル夫人との裁判に負けた後、賠償金を払うのを拒否し、債務者監獄に入れられるピクウィック氏の頑固さを戒めるものである (Herbert 17; Patten 362)。「ブレイダッド王子の伝説」(“The True Legend of Prince Bladud”) は、父親に結婚を反対され、しかも愛する人を失い、悲嘆にくれた王子が地中に飲みこまれ、彼の涙が泉になったというパースの泉の起源についての物語だが (507-11; ch. 36)、これは、同様に父親に自分の恋愛を反対される、ピクウィック氏の友人ウィンクル氏と関係がある (Patten 361)。そして、「墓堀男をさらった鬼の話」(“The Story of the Goblin who stole a Sexton”) は、クリスマスの日にさえ、隣人とのつきあいを避けるゲイブリエル・クラブの人間嫌いを批判するものであり、逆にクリスマスにウォードル一家と親交を深めるピクウィック氏を肯定す

る (Patten 362-65) !

しかし、パタンとハーバートが指摘しているように、ピクウィック氏はこうした物語に関心を示しておらず (Patten 358; Herbert 8), 他の聞き手の反応も消極的なものである。そして、両者とも、前述の物語に含まれている意味や教訓を読みとっていない。例えばウォードル氏の邸宅で「囚人の帰還」 (“The Convict’s Return”) と題された物語が語られようとするとき、ピクウィック氏は椅子を前に引き出し、興味深そうに耳を傾ける (73; ch. 6)。しかし、この話はピクウィック氏の眠りを誘う効果しかもっていなかったようである (“[. . .] the somniferous influence of the clergyman’s tale operated so strongly on the drowsy tendencies of Mr. Pickwick [. . .], 82; ch.7)。先に紹介した「ブレイダッド王子の伝説」を読んだ後も、ピクウィック氏は感銘を受けなかったらしく、読み終わると、非常に疲れたような顔をして、あくびをしてベッドへ向かう (511; ch. 36)。おそらく後者の場合には、ピクウィック氏の科学者としての側面が重要なかもしれない²。ピクウィック氏が会長を務める「ピクウィック・クラブ」は「知識の向上と、知識の普及のために」 (“to the advancement of knowledge, and the diffusion of learning,” 1; ch.1) 設立され、ピクウィック氏は小説の冒頭で、トゲウオの理論とハムステッドの池の源流を発見したことで旋風を巻き起こした人物と紹介されている (2; ch. 1)。ハムステッドの池の源流を発見するという地理学的偉業を達成した人物が、王子の涙が泉になったなどという地理学の理論とはまったく相容れない、非現実的かつ非科学的な話に興味を示さないのは理解できる。

それでは、『ピクウィック』のなかで、そのように無視される物語は何を意味しているのだろうか。ここでは、この問題を当時の社会との関連から、とくに、古い伝説、迷信、風習、遺跡にかんする研究という意味での「アンティークウァリー」 (“antiquary”) や、その後の「フォークロア」 (“folklore”) との関連から考えてみたい³。

『ピクウィック』に挿入されている物語にたいして否定的な態度を示すのはピクウィック氏だけではない。超自然的な出来事を描く物語にたいしては、しばしば、その出来事が現実にはありえないといって否定する聞き手の姿が描かれている。例えば、ウォードル氏がピクウィック氏に紹介する「墓堀男をさらった鬼の話」は、人間嫌いの墓堀人ゲイブリエル・グラブが、クリスマスを楽しむ人々から離れて、孤独に仕事をしていると、妖精たちと鬼があらわれ、地下の世界に引きずりこまれる、という物語である (396-405; ch. 29)。だが、ある人々は、ゲイブリエルが鬼に連れ去られたという話は、彼が墓場でジンを飲んで、眠って見た夢であると考えるのである (“[. . .] they looked as wise as they could,

shrugged their shoulders, touched their foreheads, and murmured something about Gabriel Grub having drunk all the Hollands, and then fallen asleep on the flat tombstone [. . .],” 405; ch. 29) .

この物語の解釈をめぐるっては、ウォードル氏がそれをピクウィック氏に紹介する前に論争が起きている .

‘The story about what?’ said Mr. Pickwick.

‘Oh, nothing, nothing,’ replied Wardle. ‘About an old sexton, that the good people down here suppose to have been carried away by goblins.’

‘Suppose!’ ejaculated the old lady. ‘Is there any body hardy enough to disbelieve it? Suppose! Haven’t you heard ever since you were a child, that he was carried away by the goblins, and don’t you know he was?’ (395; ch. 28)

ゲイブリエルが鬼に連れ去られたという話を信じこんでいるウォードル夫人 (“the old lady”) にたいして、彼女の息子のウォードル氏はそれを信じていないのである .

このような超自然現象を信用する聞き手と、それを否定する聞き手という対比は他の物語にもあらわれている . ピクウィック・クラブの会員であるタップマン氏は、ある旅商人から奇妙な話を聞く . トム・スマートは嵐の夜、宿屋に泊ろうとするのだが、宿屋に入ると、背の高いほお髭を生やした男が宿屋の未亡人を口説いていた . その後、部屋で寝ようすると、椅子が老人の姿に変身し、未亡人を口説き落とそうとしていた男は、本当は財産目当てで彼女を騙そうとしていると告げる、という物語である (“The Bagman’s Story,” 178-91; ch. 14) . そして、スマートの物語を聞いた後、聞き手のあいだで次のようなやりとりが行われる .

‘Everybody believed the story, didn’t they?’ said the dirty-faced man [. . .].

‘Except Tom’s enemies,’ replied the bagman. ‘Some of ’em said Tom invented it altogether; and others said he was drunk, and fancied it [. . .].’ (191; ch. 14)

スマートの物語を本当のことだとする旅商人の主張にもかかわらず、ある人々は、スマートが見た老人に変身する椅子は、彼が酔っ払って見た夢か幻覚であると解釈しているのである .

別の場面でピクウィック氏は、ロンドンの法学院に古くから住んでいるジャック・バムパーという老人から、ある法学院の部屋で死んだ男の幽霊が、新しい住人が来た後に、部屋に置いてあった棚から出てきたという話を聞くが、やはり聞き手のひとりとその話を否定する .

‘That ain’t bad, if it’s true,’ said the man in the Mosaic studs, lighting a fresh cigar.

‘If!’ exclaimed the old man, with a look of excessive contempt. (283; ch. 21)

この場合も、棚から出てきた幽霊を否定する聞き手と、それを信じこんでいる古い世代の「老人」が対比されている。しかも、聞き手のなかの一人は、バムバー老人がこの話を紹介する前に、「彼は法学院で孤独に生きてきて、半分気が狂ってしまった」(“[. . .] he has lived alone in them, till he’s half crazy,” 278; ch.20) とピクウィック氏に説明し、老人の言うことは信用できないとほのめかしている。

こうした聞き手たちが超自然的現象を描く物語に否定的な態度を示すのは、その現象が物理的に不可能である、つまり非科学的であるためだが(この点で、彼らは科学的であることを重視するピクウィック氏と結びつく)、このような態度には、『ピクウィック』が発表された当時の人々の姿が反映されていると思われる。例えばアンドルーズ (Malcolm Andrews) やオストリー (Elaine Ostry) は、19世紀前半の中産階級が幽霊や妖精の物語を、農民や労働者階級に象徴される非理性的な文化の代表として、自らの文化から(とくに子供の読み物から)排除しようとした傾向について指摘している (Andrews 32-34; Ostry 39-40)。しかし、そうした傾向は中産階級だけに見られたわけではない。19世紀には多くの労働者階級の人々が自伝を書いたが、彼らの多くが、自分の生まれ育った環境の後進性を示すために、古い世代の人々が幽霊などの超自然現象を信じていた事実を挙げている (Vincent 167-68)。つまり、19世紀の前半において、幽霊のように物理的に説明できない超自然現象を信じることは、非科学的で遅れた社会の産物として、否定的に見られるようになっていたのである。『ピクウィック』のなかで、超自然現象を描く物語を信じているウォードル夫人やバムバー老人のような「古い」世代にたいして、「新しい」世代がその種の物語を否定していることは、科学的であることを重視する当時のこうした傾向を反映しているといえるだろう。

そして、幽霊の物語や妖精物語を、農民や伝統的労働者階級に代表される「迷信的で」、「後進的な」民衆の文化と規定するのに大きな役割を果たしたのが、古い伝説、迷信、風習、遺跡などにかんする研究という意味での「アンティクウアリー」であり、その後の「フォークロア」である。アンティクウアリーやフォークロアが『ピクウィック』にとって重要なのは、ピクウィック・クラブの活動がアンティクウアリーやフォークロアを含んでおり、とりわけピクウィッ

ク氏一行が超自然現象を描く物語を多く収集しているからである。アンティクゥアリーやフォークロアの内容は、伝説や風習、祭日の行事などの観察や収集が中心であり、またその伝説や風習は超自然的な現象を主題とするものが多かったのである (Dorson 1-90)。それでは、アンティクゥアリーやフォークロアはそのような伝説や物語をどのように扱ったのだろうか。

アンティクゥアリーの内容を多く載せていた『ジェントルマンズ・マガジン』 (*Gentleman's Magazine*) で 1790 年にある読者から、かつては妖精が踊った跡と想定されていた、草原に円形の輪ができる「妖精の輪」 (“fairy ring”) の本当の原因は何なのかという質問が寄せられ (710)、多くの読者が回答を寄せている。そして、その原因として、馬や牛の糞あるいは尿によって草が枯れるため (710, 800)、モグラが地下を掘ったため (1072)、雷による電気のため (1007, 1106)、草が枯れ地中の組織が変化するため (*Gentleman's Magazine* [1791], 36) という仮説が挙げられた。『アセニアム』 (*Athenaeum*) に連載された「フォークロア」 (“Folk-Lore”) というコラムでは、そのコラムを編集していたトムズ (William John Thoms) が「七人の笛吹き」 (“The Seven Whistlers”) という空中に笛の音が聞こえる伝説を紹介している。トムズは、かつては妖精などの超自然的存在のせいになっていたその現象の原因は、チドリ (plover)、ヒドリガモ (widgeon)、コガモ (teal) といった鳥が飛ぶときの音ではないかと推測している (*Athenaeum* 19 Sept. 1846, 955)。

また、クローカー (Thomas Crofton Croker) と並び 1820 年代のアンティクゥアリアンとして有名なカイトリー (Thomas Keightley) は、妖精物語 (fairy-tale) が生みだされたのは、農民や未開人、あるいは過去の時代の人々が自然現象の原因を科学的に突きつめていかに、単純に超自然的存在 (妖精) にその原因を求めたためと想定する (1)。

このようにアンティクゥアリーやフォークロアがしばしば関心を抱いたのは、過去の時代の人々がどのように自然現象を誤って解釈し、超自然的存在に原因を求めたのか、という理由を探ること、あるいは、超自然的存在が伝説や物語のなかに存在している理由を、科学的知識をもたなかった過去の人々が珍しい自然現象の原因としてそうした超自然的存在を仮定した結果と説明することだったのである。

とすれば、超自然現象を描いた物語は、科学知識をまだ獲得していなかった過去の人々の思考が物語という形で現在にまで残存したものであり、また、科学知識の普及とともに失われていくもの、ということになるだろう。実際トムズが前述の「フォークロア」で述べているように、アンティクゥアリーやフォークロアの目的は、そのように、科学や教育の進歩とともに消滅しつつある物語を、それが消滅してしまう前に、収集することだったのである (*Athenaeum* 29 Aug. 1846, 886-87; Ostry 15)。

そして、このような姿勢の問題点は、ピクウィック氏の活動に暗示されている。ピクウィック・クラブは収集した伝説や物語を報告するように会員に求めている (“That [...] they be requested to forward, from time to time, authenticated accounts of their journeys and investigations, of their observations of character and manners, and of the whole of their adventures, together with all tales and papers [...] to the Pickwick Club, stationed in London,” 2; ch. 1)。このようにして報告されたさまざまな情報がじつは『ピクウィック』という小説になっているのだが、前に見たように、収集された物語にピクウィック氏は興味を示していない。にもかかわらず、物語は何らかの価値のあるものとして収集されている。また、ピクウィック氏はロチェスターで発見した石碑を「非常に古いもの」と鑑定し収集している (137; ch.11)。つまり、物語と古い石碑は同じ収集品として同等のものとして扱われているのである。そして、いっぽうで、ピクウィック氏はそのような物語に「物語」としての興味は感じていない。このピクウィック氏の姿は、アンティクゥアリアンやフォークロリストのなかに、同様に物語を古い石碑のように扱う傾向があることを暗示している。彼らにとって幽霊や妖精の物語とは、過去の人々の思考が物語という形で生き延びた珍しい絶滅種であり、時代の進展とともにその珍しさを増す、それゆえ収集する価値のある古い石碑のようなものなのだ。誰かが語るのに耳を傾け、また誰かに語るための「生きた」物語ではなくなっているのである。

しかし、幽霊や妖精の物語は、アンティクゥアリアンやフォークロリストが想定するように、科学的知識の欠如だけから生みだされているのだろうか。

前に述べたように、カイトリーは妖精物語が生みだされた理由を、農民や未開人が自然現象の原因を科学的に突きつめていかずに、単純に超自然的存在にその原因を求めたためと説明した。妖精という存在を生みだした人々の想像力は、自然現象にたいする科学的解釈の欠如という点からしか説明されていないのである。この点は、すでに見たように、『ピクウィック』のなかにもあらわれている。ある聞き手は、トム・スマートが見た老人に変身する椅子は、スマートが眠って見た夢と推測し、別の聞き手は、棚から幽霊が出てきた話をするバムパー老人を狂人とみなしている。このような聞き手は、そうした超自然現象を描く物語が夢という自然現象の誤った解釈から生まれているか、あるいは狂気の産物と想定し、その点だけに注目する。

しかし、超自然的な現象を描く物語は、いつでも科学的解釈の欠如から生みだされるわけではない。ディケンズの作品のなかで、そのことをはっきりと示しているのが、『非商用の旅人』に収められている「子守り女の話」 (“Nurse’s

Story”)である。その短いエッセイでディケンズは幼年時代を回想し、子守り女（彼の乳母のメアリー・ウェラー [Mary Weller] がモデルである）が語ってくれた怖い話を紹介する。その一つは、結婚した女性を次々と食べてしまう人殺し將軍(Captain Murderer)の話で、もう一つは、言葉を話す鼠にとりつかれるチップスの物語である。

そして、ディケンズは、子守り女が、人殺し將軍の話を語ったとき、子供の息を吸い取ってしまう「黒猫」(“The Black Cat”)にたいする薬だといって、薬を自分に飲ませたことを覚えている。また、チップスの物語も思い出のなかでいつでも薬と結びついているので、薬で不機嫌になっている自分のために、その話は語られたのだらうと推測する(153)。つまり、子守り女は、子供に薬を飲ませるときに、これらの物語を語っているのであり、彼女が果たさなければならぬ労働の一環として、あるいは、薬を役にたつものと伝えるための、子供とのコミュニケーションのより効果的な方法として、その物語を語っているのである。彼女はある自然現象を科学的に解釈できなかったために、こうした物語を生みだしたわけではないのである。

また、チップスの物語では、水兵になったチップスが、船が沈没する（なぜなら自分たちが船を齧っているから）と鼠が警告した、と船長に報告するが、誰も鼠の姿を見ておらず、鼠の警告はチップスの妄想だった、と示されている場面がある(157)。これは鼠が非常を知らせるといふ迷信の変形であるが、より一般的な形では、鼠がいなくなると危険である、というものである。コンラッド(Conrad)の『青春』(Youth, 1902)でもこの迷信がとりあげられ、マーロウ(Marlow)を含めた船員たちは、鼠が船から脱出するのを見たとき、その迷信を笑い飛ばすが、後に船が爆発する(16-23)。しかし、この迷信が船乗りのあいだで生みだされたのは、彼らが迷信的で科学知識を欠いていたからではなく、むしろ、彼らが死と隣り合わせの危険な状況で労働していたためだろう。危険な労働状況がこの迷信を生みだす要因として重要なのは、鼠が非常を知らせるといふ考えが炭鉱でも信じられていたことを考えれば、いっそう明らかである。

つまり、ここに示されているのは、物語の発生を科学的推理の欠如から説明するアンティクゥアリーやフォークロアの視点では、物語の誕生を、物語を語る人々にとってより重要な動機や原因から見ることはできない、ということなのである。「子守り女の話」に体现されている無名の人々の物語は、彼女が幼いディケンズに薬を役立つものと説得するとき物語を語ったように、聞き手に何らかの教訓やメッセージを伝えるコミュニケーションの技術であり、また、彼女が語ったチップスの物語のなかに示されているように、船乗りや坑夫のような、ある特別な状況を生きてきた人々が、前の世代から代々受け継いできた、例えば危険に注意を促すためのメッセージの役割を果たすものである。

ゲイブリエル・グラブの物語の教訓については、語り手のウォードル氏自身が述べているが（“[. . .] if a man turn sulky and drink by himself at Christmas time, he may make up his mind to be not a bit the better for it [. . .],” 405; ch. 29）、この物語が、ウォードル氏と彼の母親が住むディングリー・デルで語り継がれてきたのも（“Haven’t you heard ever since you were a child [. . .]?” 395; ch. 28）、たんにその奇妙な内容のためだけでなく、クリスマスの日にも人とのつきあいを避けるゲイブリエルの態度が社会にたいする脅威と思われ、こうした教訓が非常に重要だったためでもあろう。

そして、『ピクウィック』のなかで、意図的に何らかのメッセージを伝達するものとして物語を利用する唯一の人物がいる。それは、ピクウィック氏の召使となるサム・ウェラーである。例えばサムは、主義に執着する人の例として、クラムベットを食べ続け自殺する人物の話ピクウィック氏に語るが（616-17; ch. 44）、この物語が、バーデル夫人に賠償金を払うのを拒絶し、債務者監獄に行こうとしていたピクウィック氏の頑固さを批判する意図で語られたことは、明らかである。しかし、サムの物語は、いつでもこのように合理的であるわけではない。ジョーという少年に、太りすぎないように注意を促す物語は、太った老人が、懐中時計の鎖が太った体に食い込んでいるので、誰もそれを盗めないことを自慢していたが、ある少年に頭突きを腹に受け、それを盗まれてしまう、というものである（390-91; ch. 28）。老人が時計を盗まれたことと、彼が太っていることは無関係なので（むしろ太っていたのでなかなか盗まれなかった）、この話が太りすぎに注意を促すものと言われると、聞き手は当惑する。しかし、これはサムの物語が単純に教訓やメッセージを伝えるのではなく、何らかのメッセージを伝えるにしても、まず聞き手に驚きや当惑を与え、考えさせることを意図しているからだろう。このことは、彼の名前から「ウェラリズム」（“Wellerism”）と名づけられることになる。「…のように」（“as . . .”）という、彼独特の比喩的表現にもあらわれている。この表現は、ある対象を別の対象と結びつけることで、対象の隠された側面を浮かび上がらせる効果をもつ場合もあるが、その両者の結びつきの意外さによって、まず聞き手に驚きを与え、その意味を考えさせる効果をもっている。⁵

‘[. . .] It’s over, and can’t be helped, and that’s one consolation, as they always says in Turkey, ven they cuts the wrong man’s head off [. . .].’ (315; ch. 23)

このように聞き手の思考をいったん停止させ、その含意を考えさせる表現であれば、自分に敵対する人物や権力関係で自分より上位の人物との対話で、相手の出鼻をくじく技術としてきわめて有効であろう。例えば、ピクウィック氏の宿敵であるバーデル夫人を訪れたときに、サムは次のように切りだすのである。

‘Werry sorry to ’casion any personal inconwenience, ma’am, as the house-breaker said to the old lady when he put her on the fire [. . .].’ (360; ch. 26)

しかし、こうした表現は、ウィリアム・H・ベイリー (William H. Bailey) が指摘しているように、ウェラーというある一人の個人の才能ではなく、多くの人々に共有されていた、いうなれば「民衆の」表現なのである。ベイリーは、ウェラーの表現はロンドンの労働者のあいだだけでなく、ランカシャーの機織職人 (hand loom weaver) やリンカンシャーの農夫、ヨークシャーの人々など、イギリスの多くの地方で見られると述べている (Bailey 32)。⁶

ピクウィック氏はサム・ウェラーが語るいくつかの話には興味を示している。例えばサムが、ロンドンで貧しい人々の地域には牡蠣売りがいることを教えると (301-02; ch. 22)、ピクウィック氏はそれをノートに書きとめている (“Those are two very remarkable facts [. . .]. I’ll make a note of them.” 302)。しかし、それはこの情報がロンドンの風俗の情報として価値があったからで、例えば、メイヒュー (Henry Mayhew) が同じ現象を指摘していることは重要である (Mayhew 1: 75)。ピクウィック氏は、アンティクゥアリアンやフォークロリストのように、ある社会や文化についての情報を与えるものとして物語に接することはあっても、そのように収集した物語に感動したり、そこから自分の人生にとって重要な何らかのメッセージを受けとったりすることはない。また、前に見たように、一部の古い世代を別にすれば、新しい世代の聞き手は、物語に超自然的な出来事が描かれると、そうした超自然的現象が物理的にありえないと断言する。彼らは、物語に何らかの教訓やメッセージが含まれていたとしても、その教訓やメッセージを読みとれない。

つまり、『ピクウィック』は、人々のあいだで長い間共有されてきた、コミュニケーションの技術としての物語、あるいは生活の知恵を伝達する技術としての物語がその機能を発揮できなくなっているという状況をとらえているのである。物語は、たんに科学性の点から、つまり、そのなかで描かれる現象が物理的な法則に従っていないという点だけから、古い世代の、あるいは農民や伝統的労働者階級の後進的な文化の例として否定されるか、あるいは、そのような文化の標本として博物館的な視点から収集され、眺められるだけのものになりつつあったのである。

ディケンズはサム・ウェラーを登場させるときに、「ロンドンの生活の標本」として紹介したが (“Let me beg your particular regard for the specimen of London Life ‘Sam Weller’ [. . .].” “To John Macrone” [30 June 1836], *Letters* 1: 154)、この表現だけでは、サムが奇妙な物語や逸話を語り、独特の表現をするロンドンの労働者

階級の標本としてとらえられているだけなのか、あるいは、ディケンズがサムに、長い体験のなかで培われてきた無名の民衆の創造性を認めているのかは、はっきりしない。しかし、いずれにせよ、ディケンズが『ピクウィック』以後、理性的・科学的であろうとする時代が物語の意義を忘れていくなかで、そうした長い間人々に共有されてきた物語本来の役割を救いだす方向に進んだことは確かである。ディケンズが「墓堀男をさらった鬼の話」と同じ、人間嫌いの老人と幽霊との出会いの物語である『クリスマス・キャロル』(1843)で示したことは、もはや超自然的現象を信じなくなった現代においてさえ、超自然的現象を描く物語が読者にメッセージを伝える手段として、いまなお有効であるということなのだから⁶。

注

- ¹ 『ピクウィック』に挿入されている物語のタイトルは、『ディケンズ短編集』(小池滋・石塚裕子訳)にあるものは、そのタイトルを用いた。
- ² J・ヒリス・ミラー (J. Hillis Miller) は、とくに小説の前半部分では、ピクウィック氏が科学者として登場すると指摘している (6-7)。
- ³ 「アンティクゥアリー」 (“antiquary”) は日本語に訳すとすれば「民俗学」となるだろうが、「フォークロア」 (“folklore”) との区別 (こちらも民俗学に含まれるだろう) を明確にするために、ここではどちらも英語表記を日本語訳として用いる。ちなみに、「フォークロア」という言葉が最初に使われたのは、本文中でも言及した、『アセニアム』 (*Athenaeum*) でウィリアム・ジョン・トムズ (William John Thoms) がマートン (Merton) というペンネームで編集し、1846年8月22日から連載した「フォークロア」 (“Folk-Lore”) というコラムである。オストリー (Elaine Ostry) はアンティクゥアリーやフォークロアとディケンズの作品との関係を詳しく論じているが、強調はアンティクゥアリーとフォークロアが物語への関心を高めたということに置かれており (10-17)、筆者の立場とは異なる。
- ⁴ 炭鉱での同様な信仰は森崎を参照 (239-40)。
- ⁵ サム・ウェラーの表現のさまざまな機能については田辺を参照 (50-59)。
- ⁶ “I have a strong sense of the immense effect I could produce with an entire book [*Christmas Carol*]” (“*To Thomas Mitton*” [6 Dec. 1843], *Letters* 3: 603). この点についてはさらにフォスター、ストーン、オストリーを参照 (Forster 1: 301; Stone 143; Ostry 109)。

参考文献

- Andrews, Malcolm. *Dickens and the Grown-up Child*. Basingstoke: Macmillan, 1994.
 Bailey, William H. “Wellerisms and Wit.” *Dickensian* 1.2 (Feb. 1905): 31-34.

- Conrad, Joseph. *Youth: A Narrative and Other Two Stories*. London: Dent, 1923.
- Dickens, Charles. *The Pickwick Papers*. 1837. New Oxford Illustrated Dickens Ser. London: Oxford UP, 1959.
- . *The Uncommercial Traveller and Reprinted Pieces*. Oxford Illustrated Dickens Ser. Oxford: Oxford UP, 1994.
- . *The Letters of Charles Dickens*. 12vols. Ed. Madeline House, Graham Storey, and Kathleen Tillotson. Oxford: Clarendon, 1965-2002.
- Dorson, Richard M. *The British Folklorists: A History*. Chicago: U of Chicago P, 1968.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. 1872-74. 2vols. London: Dent, 1966.
- Herbert, Christopher. "Covering Worlds in *Pickwick Papers*." *Nineteenth-Century Fiction* 27 (1972): 1-20.
- Keightley, Thomas. *The Fairy Mythology*. 1828. London: G. Bell, 1900.
- Mayhew, Henry. *London Labour and the London Poor*. 4 vols. 1851-61. London: Frank Cass, 1967.
- Miller, J. Hillis. *Charles Dickens: The World of his Novels*. Cambridge, MA: Harvard UP, 1958.
- Ostry, Elaine. *Social Dreaming: Dickens and the Fairy Tale*. New York: Routledge, 2002.
- Patten, Robert L. "The Art of *Pickwick's* Interporated Tales." *ELH* 34 (1967): 349-66.
- Stone, Harry. *Dickens and the Invisible World: Fairy Tales, Fantasy, and Novel-Making*. Bloomington: Indiana UP, 1979.
- Vincent, David. *Bread, Knowledge and Freedom: A Study of Nineteenth-Century Working Class Autobiography*. London: Europa, 1981.
- 『ディケンズ短編集』小池滋・石塚裕子訳，東京：岩波書店，1986年。
- 田辺洋子「*The Pickwick Papers* における Sam Weller の位置づけ」『広島経済大学研究論集』24巻3号 2001年12月．49-60．
- 森崎和江『奈落の神々 炭鉱労働精神史』東京：大和書房，1974年。